

令和 6 年 9 月 26 日現在

機関番号：83603

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13551

研究課題名（和文）戦後日本蚕糸業と地域社会—天龍社資料を中心として—

研究課題名（英文）Post-war Japanese sericulture industry and local communities- Re-organization of Tenryusha documents

研究代表者

太田 仙一（Ota, Senichi）

飯田市歴史研究所・研究部・調査研究員

研究者番号：60826147

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では、長野県下伊那地域で戦後に日本屈指の組合製糸として活動していた天龍社の経営内部資料（天龍社資料）の再整理・目録作成作業を実施し、関連資料の調査・収集・撮影も行った。天龍社資料は、史料117箱（およそ3500点）、図書12箱（949点）に及ぶ膨大な史料群であり、これらの史料についてすべて目録を再整備し広く一般にも公開可能な状態にするとともに、社内報をはじめとする運営を理解する際の基本史料の撮影を完了させた。あわせて飯田市内の図書館や支所文書で関係史料を調査・発見するとともに、これらの史料群を利用した論文などを発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近現代日本経済を支えた蚕糸業の中でも、日本屈指の組合製糸である天龍社に着目しその経営史料を整理し広く利用できる状況にした。天龍社資料の大きな特徴は、戦後期の経営内部史料が多数含まれている点である。戦後日本蚕糸業は、産業構造の変化などにより衰退していく産業とされ、本格的な分析がされてこなかった。天龍社資料からは、経済状況や国家政策に拘束されつつ、蚕糸業を存続させようとする地域社会の姿を確認できる。また、地域史料などを合わせて調査することで、同時期の天龍社がそこで働く若年層の労働者たちの文化なども含む広範な活動の場になっていたことも明らかとなる。

研究成果の概要（英文）：In this project, work was carried out to re-organize and catalogue the internal management documents (Tenryusha materials) of Tenryusha, which was one of the leading cooperative silk mills in Japan after the war in the Shimoina region of Nagano Prefecture, as well as researching, collecting and photographing related materials. The Tenryusha materials are a huge group of historical documents, amounting to 117 boxes of archives (approximately 3500 items) and 12 boxes of books (949 items), all of which were re-catalogued and made available to the public. At the same time, we researched and found relevant archives in libraries and branch office documents in Iida City, and published articles and other papers using these archives.

研究分野：経済史

キーワード：蚕糸業 戦後史 経営史 戦後地域社会 戦後青年運動 戦後労働運動 農村社会 蚕業技術

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本蚕糸業史は、近現代日本経済史研究において最も重要な分野の1つとして位置づけられ、日本史研究・経済史研究の分野において研究が蓄積されてきた。その一方で、特に戦後についてはレーヨンなどの普及や日本の産業構造の変化に伴う繊維産業全体の衰退に伴う経済の中での地位低下などにより、戦後を対象にした蚕糸業研究はほとんど進展していなかった。また、研究の前提となる資料状況に関しても、蚕糸業関係の資料(特に組合製糸のような製糸工場関係)は発見や公開が進んでいない状況であった。

一方で、戦後日本社会・経済の中での蚕糸業の地位に関しては、あらためて再検討が求められる状況であった。特に必要な視点は、地域社会の中での養蚕業との接続である。戦後日本農村社会については、高度成長期以降、農業人口の減少や農業構造の転換などが指摘されるが、その際に「転換」の対象の一つとして存在していたのが養蚕業であった。ただし、養蚕業の衰退消滅の過程については、いまだ十分な検討が進んでいない状況であった。

上記のような観点から、戦後日本の農村社会・地域社会の把握のためには、改めて地域の資料に即した蚕糸業史研究が求められる状況であった。

2. 研究の目的

研究の最終的な目的は、戦後蚕糸業の分析の進展とそれによる地域社会の戦後の変容プロセスの解明ということができる。そしてそれを実現するためには、その研究の基盤となる資料状況の整備改善が不可欠であるという認識であった。そのため、具体的には飯田・下伊那地域で戦前から戦後にかけて日本最大の組合製糸であった「天龍社」の資料に着目した。天龍社は、戦後に組合製糸として特に1950年代から1960年代にかけて日本屈指の養蚕地帯でもあった長野県下伊那地域を基盤に活動した。1990年代に閉鎖した際に、残されたその膨大な経営資料が飯田市歴史研究所に寄贈されていた。この資料群については目録なども作成はされていたが、紙版に限定されており、また細目録がとられていないなど、幅広い研究活用には不便な状況であった。また保存状況も、引き取り時のミカン箱のままのものがあるなど課題が多い状況であった。さらに目録作成時から時間が経過しており、調査実施時の状況をする人材が少なくなったことや資料が数回にわたって寄贈されたことなども影響し、「天龍社資料」そのものの全体像を把握することが困難な状況になっていた。

以上のような状況を踏まえ、本研究課題では、天龍社資料の再整理・目録整備を行い幅広く利用閲覧可能な状況にすること、そのうえでそれらの史料をもとにした戦後蚕糸業を中心とした地域社会経済史研究の進展を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究の方法としては、まず天龍社資料について、科研費を用いて整理者に依頼したうえで、史料を1点ずつ再調査して目録を作成するとともに、中性紙封筒への入れ替え・史料保存箱への移し替えなどを行い、保存状況の改善も併せて実施した。再整理・目録再整備作業と並行して、研究において重要となる資料類の写真撮影も並行して実施した。

(2) 天龍社は、長野県飯田・下伊那の農村社会を基盤としており、それに対する理解も研究には必要不可欠である。そのため、地域社会に残る関係する史料群の調査にも取り組んだ。飯田市と合併する時代の旧村役場の文書(支所文書)や公民館・図書館などに残される青年団関係の史料類なども並行して調査を行い、写真撮影などを実施した。

4. 研究成果

(1) 整理事業の完了と目録再整備の完了:「史料」と「書籍」の明確化

天龍社資料について、すべての史料類の調査と目録再整備を完了した。保存状況については、すべての史料を史料保存箱へ詰め替えることも含め終えることができた。その総数は129箱となる。特に重要なのは、天龍社資料について、「史料」と「書籍」の区分を明確化した目録形態に変更できた点である。従来の目録では、寄贈時期の違いなどにより史料の中でも一時史料と刊本などの図書が混同されており、その番号類が重複するなどの混乱があった。それらを整理し、天龍社資料として統一的に把握することが可能となった。これらの目録は、飯田市歴史研究所などで広く閲覧可能となる。またその目録の一部はすでに『飯田市歴史研究所年報』において公開もしている。

(2) 周辺資料調査の充実 青年団文書などとの関連性

天龍社資料の関連資料を、飯田市内の支所文書や図書館で調査した。特に、屈指の養蚕地帯であった川路地区の川路支所文書、飯田市中心図書館・同上郷分館に所蔵されている「青年団関係文書」などを調査し、その中に収録されている天龍社・養蚕関係の史料類を多数発見し撮影することができた。特に図書館に残されていた青年団関係の史料からは、天龍社が地域社会の農村青

年にとって、その経済活動に非常に大きな影響を及ぼすものであったことが明らかになった。飯田・下伊那の青年団運動は、日本社会における戦後青年団運動の先駆的な事例として研究対象になったが、文化・政治的観点に分析が集中しており、具体的な経済活動との兼ね合いは明らかになってこなかった。今回、「天龍社」という視点から改めて史料調査を行ったことで、飯田・下伊那の農村青年の戦後地域社会における活動についても新たな視点を得ることが研究上の大きな成果であると考えている。

(3) 今後の展望 地域の中の組合製糸と養蚕業

今回の研究では、天龍社資料の再整理を通して戦後の日本蚕糸業史研究を進展させるための基盤を構築することができた。そのうえで、今後の研究において注意すべき点としては、蚕糸業の衰退と地域社会の関連性である。戦後における蚕糸業の衰退傾向は、天龍社資料からもうかがうことができる。しかしその一方で、蚕糸業は養蚕農家なども含めた非常に多数の人々が従事する産業なので、利害関係を持つアクターも多数存在する。特に地域社会においても、各養蚕農家や青年団、あるいは政党などの様々な利害が錯綜している。一方で衰退傾向はありつつ、その中でどのように産業として維持し利益を分配していくのかというのは地域社会にとって大きな課題であり、その中心点に天龍社は存在していた。

今後は、天龍社経営の分析を前提としつつ、それに関わる地域内外の多数の人々の思惑を分析対象にしたい。それは、戦後日本蚕糸業の分析であるとともに、戦後の日本社会の分析にも有益なものであると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 太田仙一	4. 巻 19
2. 論文標題 明治三〇年代平岡村における「バラ狩り騒動」再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 飯田市歴史研究所年報	6. 最初と最後の頁 119・127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田仙一	4. 巻 18
2. 論文標題 天龍社の盛衰と蚕業技術員の機能	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 飯田市歴史研究所年報	6. 最初と最後の頁 42、49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 太田仙一
2. 発表標題 1950年代における天龍社の経営－繭糸価格安定法の成立とその下での運営についての検討のはじめとして－
3. 学会等名 飯田市歴史研究所定例研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 飯田市歴史研究所	4. 発行年 2022年
2. 出版社 飯田市歴史研究所	5. 総ページ数 309
3. 書名 Oral history 3 生存の地域史をかたる	

1. 著者名 飯田市歴史研究所	4. 発行年 2021年
2. 出版社 飯田市歴史研究所	5. 総ページ数 83
3. 書名 『史料で読む飯田・下伊那の歴史2 川路のあゆみ 近世から近代へ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------